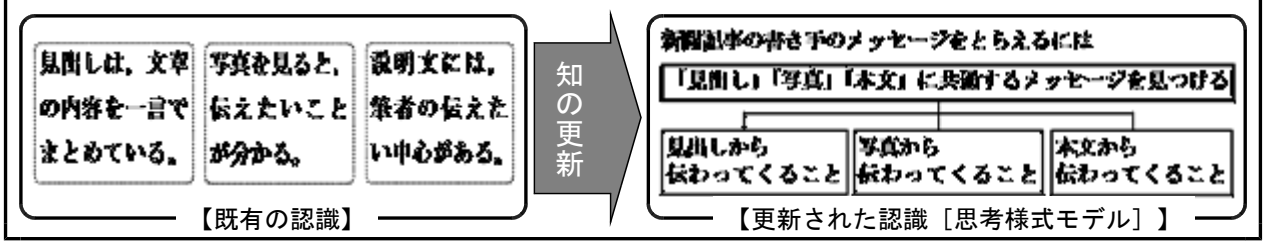
４　思考様式を共有化するユニバーサルデザインの授業の実際

「新聞記事が伝えること」（第５学年）

（１）本実践の目標構造

【育成したい「思考力」】
見出しや写真，本文を手がかりに，新聞記事の書き手のメッセージをとらえる力



本実践前の子どもたちは，「見出し」「写真」「本文」それぞれに何らかのメッセージが込められていることを認識していた。しかし，それらをつないで，そこに共通するメッセージを読み取る意識は弱かった。

そのような認識から上記思考様式モデルへと更新を試みた。本「思考力」育成のためには，この思考様式モデルが必要となる。新聞記事に採用される写真は，毎日7,000枚ほど新聞社に送られてくるものの中から選ばれたものである。見出しはその記事の中心を短い言葉で表したものである。「見出し」「写真」「本文」の３つに共通のメッセージを見つけることは，記事の根底に流れる書き手のメッセージを一層強くとらえることにつながるのである。

（２）　思考様式を共有化する言語活動

①　集団吟味による「承認・合意」

子どもたちは，本実践までの学習において，同じ出来事を扱った２社の記事を比較し，それぞれの記事は固有のメッセージをもっていることに気付いていた。本時は，東京ディズニーランド（以下「ＴＤＬ」と表記）再開の記事を読むに当たり，何に目を付ければメッセージが読み取れるのかを話し合わせることにした。教師は，その際に出された「見出し」や「写真」，「本文」という言葉を板書上に位置付け，それらを手がかりにすればよいことの「承認・合意」をめざした。

②　体験の言語化による個の「実感・納得」　～ユニバーサルデザインの働きかけ～

新聞記事の写真を複数の別の写真と置き換えながら，ふさわしいものを見つけ出すようにすることで，「写真」と「見出し」「本文」を繰り返し吟味する場の設定

ＴＤＬ再開の記事（新聞記事を基に教師改作，下資料参照）の見出しと本文からは，「節電」にかかわる内容がその記事の中心として読み取れる。さらに，見出しには「笑顔も節電」と表されている。東日本大震災の被災地や被害を受けた方のことをおもんぱかる内容である。しかし，その記事の写真には，笑顔で来園する人々が写っているのである。子どもたちは，記事にふさわしい写真を求めると考えた。

ただ，その求めるイメージが明確に描けない子どもや，たとえ代わる写真を提示したとしても，こだわりの強さ故，思いに合致する写真になかなか出合えない子どものいることが想定された。

そこで，「ひかえめの笑顔」や「節電」などの子どもたちの着眼点に対応できるような写真を複数提示することとした。子どもたちは，手元の新聞記事の写真部分に，提示された写真を一枚一枚あてがいながら，それぞれの場合の「見出し」「写真」「本文」のつながりを確かめていくだろう。これら３つのつながりを繰り返し吟味させるのである（**情報を精選し，選択の場を設定したり，手元で操作させたりする**）。このように思考対象を強く意識付けながら記事のメッセージをとらえていくことで，思考様式のよさの「実感・納得」をめざした。

TDL再開　笑顔も節電

【本実践で取り上げた記事】

（３）ユニバーサルデザインの働きかけによる学習指導の実際

①　本時の板書

②　「思考様式を共有化する言語活動」の詳細

ア　見通しの場面

子どもたちは，これまで，同じ出来事を扱った２社の記事を比較する中で，記事のメッセージを読むための手がかりを見つけてきている。本時，ＴＤＬの記事のメッセージをとらえる際，見通しの場面で子どもから出された手がかりには次のようなものがあった。

写真（ロングかアップか）／キャプション／本文／リード／見出し／小見出し　（上記板書写真右方参照）

このような見通しをもち，子どもたちはＴＤＬの記事からそのメッセージを読んでいった。

イ　自力解決の場面

子どもたちは，「見出し」「本文」「写真」それぞれから記事のメッセージをとらえていった。実践前に行った「思考力」テストで，子どもたちが最も深くメッセージを読み取れていたのは，この３つのうちの「本文」からであった。しかし，その中でＡ児は文章の読み取りを苦手とする傾向が見られた。そこで，自力解決の場面では，Ａ児に対して重点的に次のような働きかけを行った。

まず，黒板横のスクリーンに記事を１文ずつ提示し，文意の把握を助けるようにした。その後，記事全体を提示し，記事のメッセージが現れている本文後半部の色を変えて示した。記事を読み取る際の着眼点を強調したのである。この支援により，Ａ児は「本文」から書き手のメッセージを想定しやすくなった。メッセージを想定しておくことで，そのメッセージに合った写真を選択することができるようになる。このようにして，続く「体験の言語化」のレディネスをそろえたのである。

【本文を１文ずつ提示】

ウ　振り返りの場面　～新聞記事にふさわしい写真を選択する場の設定～

ここまでの学習において，見出しにある「笑顔」という言葉に着目する子どもと，「節電」に着目する子どもがいると予想した。そこで，その子どもたちに対応できるよう，それぞれＡ，Ｂの写真を準備しておいた。さらに，記事から震災による自粛ムードを受け止める子どもたちに対応できるよう，静的な印象を与えるＣを準備しておいた。

【Ａ 笑顔のない客】

【Ｂ 薄暗いＴＤＬ】

【Ｃ 被災地への思い】

写真を選ぶ「体験」の際には，思考対象である「見出し」「写真」「本文」が強調されるよう，３枚の写真それぞれを手元の新

聞記事の写真部分にあてがいながら，ふさわしい写真を選択するようにした。そうすることで，視覚的に情報同士が近くなり，記事内容のつながりが吟味しやすくなると考えたのである。

この活動において，子どもたちは次のような反応を示した。

【Ａの写真を選択した子ども】
・ミッキーマウスがそばにいるのに，お客さんが笑顔でない。だから，見出しの「笑顔も節電」ということがよく伝わってくる。

【Ｂの写真を選択した子ども】
・薄暗くて，記事にある「節電」という言葉をよく表している。

【Ｃの写真を選択した子ども】
・震災のことがよく分かり，これを読んだ東北の人も，自分たちのことを考えてくれていることが分かり，うれしくなる。

【写真を選択する子ども】

このように，子どもに提示する写真を精選した上で，子どもの着眼点に応じた選択の場を設けることで，子どもたちは「見出し」「写真」「本文」に目を付けて記事を読み取ろうとした。そして，書き手のメッセージを読み取る際の思考対象である「見出し」「写真」「本文」が強調され，思考様式のよさの「実感・納得」につながったと考える。

（４）成果と課題

①　量的・質的な検証

本実践の前後で「思考力」テスト（８点満点）を行い，「見出し」「本文」「写真」をつないで記事のメッセージを読み取る力の伸びを検証した。その結果，平均値で1.5点の向上が見られた。この差についてt検定を行ったところ，有意差が見られた〔$t(37)=6.11$，$P<.01$〕。このことから，本実践を通し「思考力」の向上は図られたと言える。

思考様式の広がりに関しては，実践前に，「見出し」「本文」「写真」を関係付けて考えられていた子どもは10名であったのに対し，実践後には27名に増加した。

また，体験の言語化における抽出児の見取りにおいては，次のような実態が明らかになった。

【「思考力」高位群】
抽出児４名全員が「見出し」と「本文」を手がかりに「写真」を選択しようとしていた。

【「思考力」低位群】
低１児（前述のＡ児）：本文とつないで読もうとしているが，その読み取りが十分とは言えなかった。
低２児：十分「実感・納得」できていた。
低３児：「体験」の様子から，思考様式をもっていると判断できるが，「言語化」にとまどっていた。
低４児：見出しではなく，記事のみからメッセージを読み取っていた。

②　考察

上記検証結果から，本教材は学習集団全体としては思考様式の共有化に一定の成果を収めたと言える。授業では，低１児の読み取りの際のつまずきを想定し，記事の本文を１文ずつ提示するようにした。そのことにより本文とつないで読もうとする姿は見られた。また，一人一人に写真選択の場を設定することで，子どもたちが自分なりの思いをこめて「見出し」「写真」「本文」のつながりをとらえようとしたことも，共有化に有効に働いたのだろう。子どもたちは，選択した写真の様子を深く読み，それが見出しや本文の叙述のどことつながるかを見つけていた。

その一方で，低位群に対する，よりきめ細かな支援の必要性も見えてきた。例えば，低１児には，本文を読み取る際に表出した反応をノートに記録するよう促し，写真選択の手がかりとするように助言することも考えられる。

また，本時，「写真の表情を読む」「本文の大切なところを見つける」という，新聞の個々の部分に目を付けて書き手のメッセージを読もうとした子どもが少なからずいた。既有の認識では解決できない状況を設定し，全員の学習問題とし，問題解決の過程で新しい思考様式のよさを「実感・納得」させる。その学習過程を意識しながら実践に当たりたい。